

5 現代のフロンティア、ヒューストン

5.3 超高層ビル、ヒューストン

ヒューストンに建つことになった71階建ての超高層オフィスビルのプロジェクトがSOMに依頼された。ヒューストンがブームタウンとはいえ、又、SOMが有名な事務所だといっても、いつも巨大なプロジェクトがあるというわけではない。オイルマネーの力により建つことになったのである。チーフ・デザイナーはサンフランシスコSOMのチャック・バセットが選ばれた。幸運にも、私もこのデザインチームのデザイナーの1人に選ばれた。このビルは、私のイェール大学の大学院での卒業設計の超高層ビルほど複雑ではなかったが、こんなにも早く、超高層ビルの実際の設計に参加出来ると思うと、うれしかった。この超高層ビルが天高く突き出ることによって、ダウンタウンのスカイラインも変わり、都市のイメージも変わってくるのである。これらのタワーと呼ばれる、超高層ビルは、まさしく現代経済のパワーと都市の繁栄を象徴する建築物である。

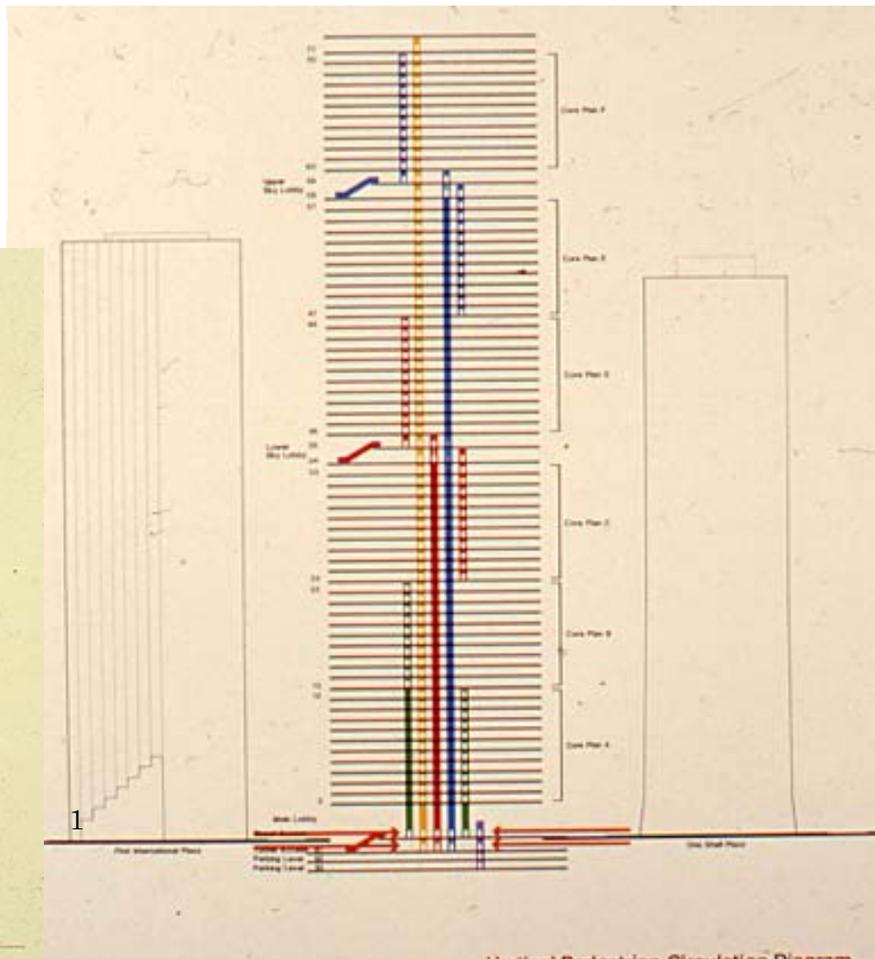
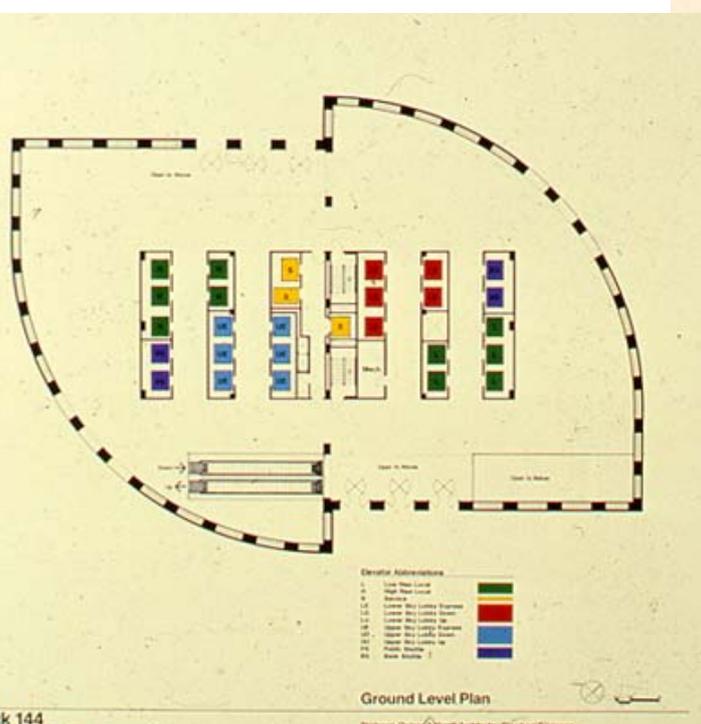
このプロジェクトのフロー・プランは、二つのコーナーを大きな1/4円形にし、平面的に横にずらした様なもので、それをグリーンのガラスのカーテンウォールで外壁を包む、シリンダーの様なタワーとなった。まったくスケール感がない超現代的なシンプルな曲面



アライバンクプラザ、71階建ての事務所ビル、1979年、チューブストラクチャーシステム、グリーンのガラスで構造体を包む。

アライバンクプラザ、71階建ての事務所ビル、外壁に4.5M間隔で鉄柱を並べ籠のようにし、チューブストラクチャーシステムとする。

2階建ての急行エレベーターで2階吹き抜けのスカイロビーまで行き、そこで各階止まりのエレベーターに乗り換える。





このチューブストラクチャーシステムは、400年前に建てられた世界一大きな木造建築、京都の西本願寺の御影堂の造りが同様な構造体である。センターに大ホールを作るために中心部には数少なく大きな柱を建て、回りに沢山の小さい柱を建てた。大きな地震に何度あっても今でもオリジナルの木造の構造体が巨大な屋根を支えている。

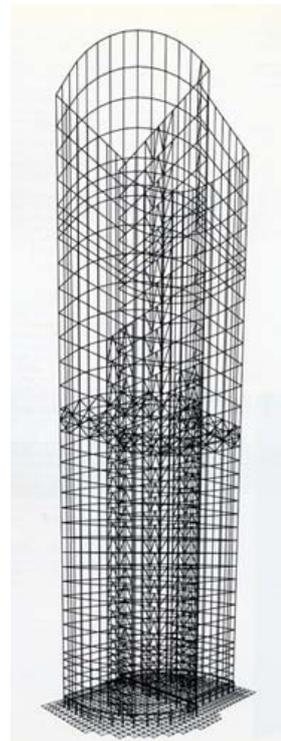


ベルトトラスとチューブストラクチャーシステム、59階、60階のトランスファーロビーのイメージスケッチ。

を強調した建物となった。人間的なスケールをつくる為に、一階のメインエントランスと地下をむすぶ外部のプラザをつくり、ゲート的なモニュメントの構造体をつ造った。

ヒューストンのダウンタウンのほとんどの新しい大きな建物は地下道でむすばれている。年中蒸し暑く、毎日40度近くの夏はとても外を歩けたものではないからである。このことを考慮して、4機の2階建ての大きなシャトル・エレベーターを設けた。地下からと地上から来る人達を、同時に、その二階建てのエレベーターで一挙に59階と60階のスカイ・ロビーまで運ぶ。この59階と60階の吹き抜け空間のロビーには、乗り換えの為にエスカレーターがある。そしてそのローカル・エレベーターに乗り換えて、70階へ上り、また50階へ下る。このエレベーター・システムを設計するのに、私は、エレベーターコンサルタントと共に2ヶ月以上もかかった。このビルの中に約50機近くのエレベーターを設置することになった。このエレベーター・システムは、超高層ビルのコアとなるもので、構造的にも機能的にもフローア・プランを設計するのに、最も大事な部分であった。図面も模型もすべて手作業であったので大勢のスタッフと労力が必要であった。このプロジェクトに関して、設計費に大分余裕があったので、沢山の若い人を私の下につけてくれた。私達は、いろいろなスケールの模型を沢山作った。何度もプレゼンテーションの図面も描いた。何度も徹夜でプレゼンテーションの準備をしなければいけないこともあった。

徹夜した後、私達はメキシカン・レストランに行った。ビールや、テキーラや、マルガリータを飲んで、ランチパーティーになった。若い人ばかりなので、ハメをはずす騒ぎになった。あのころテキサスでは酔っ払い運転が厳しくなかったの

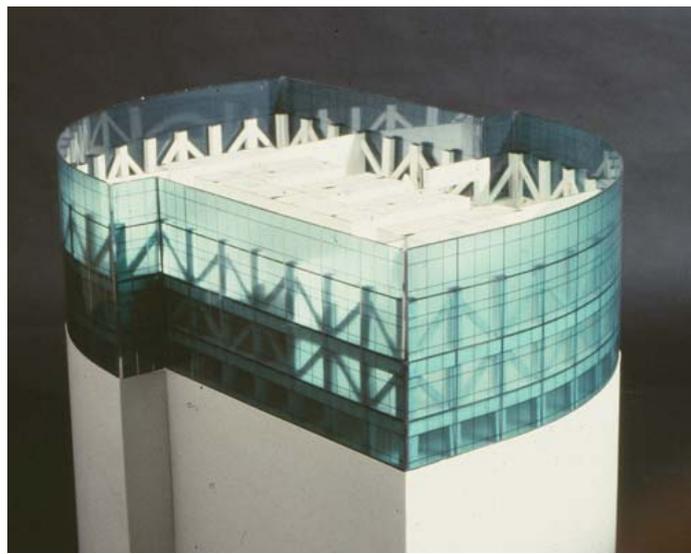


ベルトトラスとチューブストラクチャーシステムの鉄骨フレームのダイアグラム

シンプルな形の構造体をカーテンウォールで包んだシリンダーのような超高層ビル。

ベルトトラスシステム、59階、60階のチューブストラクチャーの外柱全部をベルトでまわすようにし、ハリケーン等の強風による横揺れの補強をする。

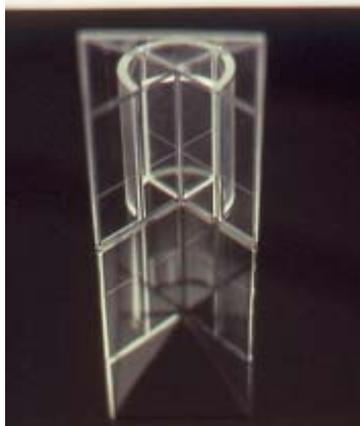
ベルトトラスとチューブストラクチャーシステム、59階、60階の部分だけの模型。(ヒューストンには地震はなかった。)



で、飲みすぎても車を運転した。オフィスにもどると、大半の若者はドラフティング・テーブルの下にもぐって寝てしまった。

私達はよく働き、よく学び、そしてよく遊んだ。SOMの若者が中心になって、いろいろな遊びをした。サマー・アウトイングといって、パーティーや日本の夏の慰安旅行みたいなこともあった。テニス大会、ピンポン大会、そしてミニマラソン大会もした。週末は仕事をする事はなかったので、よくテニスはしていた。その結果、私はSOMのテニストーナメントで、準優勝した。ピンポン大会では、子供の頃、イギリスの大会でゴールドメダルを得たというスタッフも参加したのだが、私は意外と簡単に優勝してしまった。

1階と2階をつなぐらせん階段、これもヒューストンの暑さに対抗して白と黒とステンレスのクールな感じの内装となった。



シンプルな幾何学的にデザインした回転ドアと横の押しドアの抽象的な模型。



1階吹き抜けのエントランスロビー、黒の御影石と白の大理石とステンレスのドアフレームの仕上げ。

しかし、マラソン大会はそうはいかなかった。日本の、私の家族はマラソン・ファミリーであったが、私だけ走るのが苦手だった。しかし、参加することに意義ありと思って、そのマラソン大会に参加することにした。2週間程前から、毎日夕方、密かに練習した。ヒューストンは蒸し暑い。大きなパークを1周すると、水を浴びた様に全身汗でびしょりになった。練習した成果があつて、そのミニマラソン大会で私は3位に入賞した。各種の大会で、私はサムライ・スピリットを発揮したのであった。

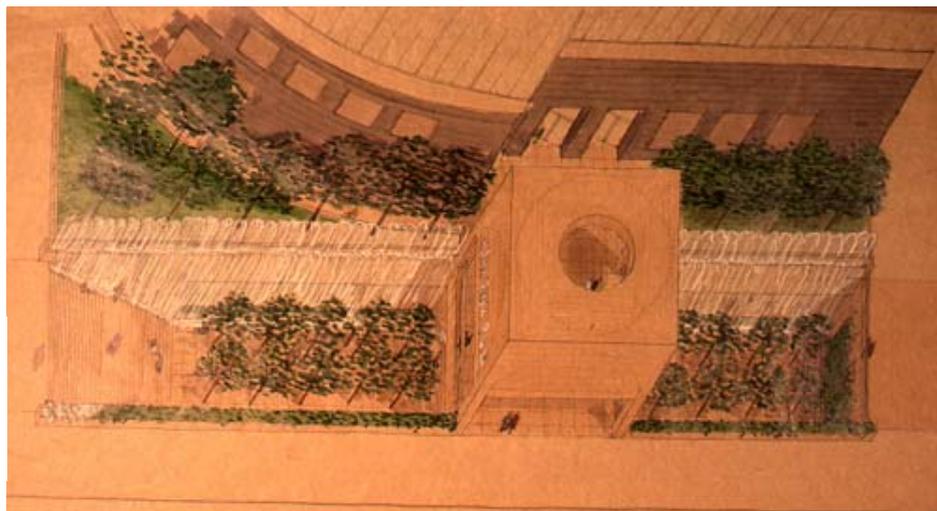
ヒューストンは、急激に発展しているブーム・タウンであった。昨日まで牛や馬がいた近くの牧場に、突然、ブルドーザーが入る。ダンプカーがあっちこっちと走り回る。そして、クレーンが立ち、超高層ビルの鉄骨が建ちはじめる。あらゆる所に住宅工事や、ショッピング・センターの工事がはじまる。猛スピードの開発に、道路整備が追いつかない。新しい建物、駐車場が作られても、排水設備の工事は遅れている。ヒューストンは暑く、湿度が高

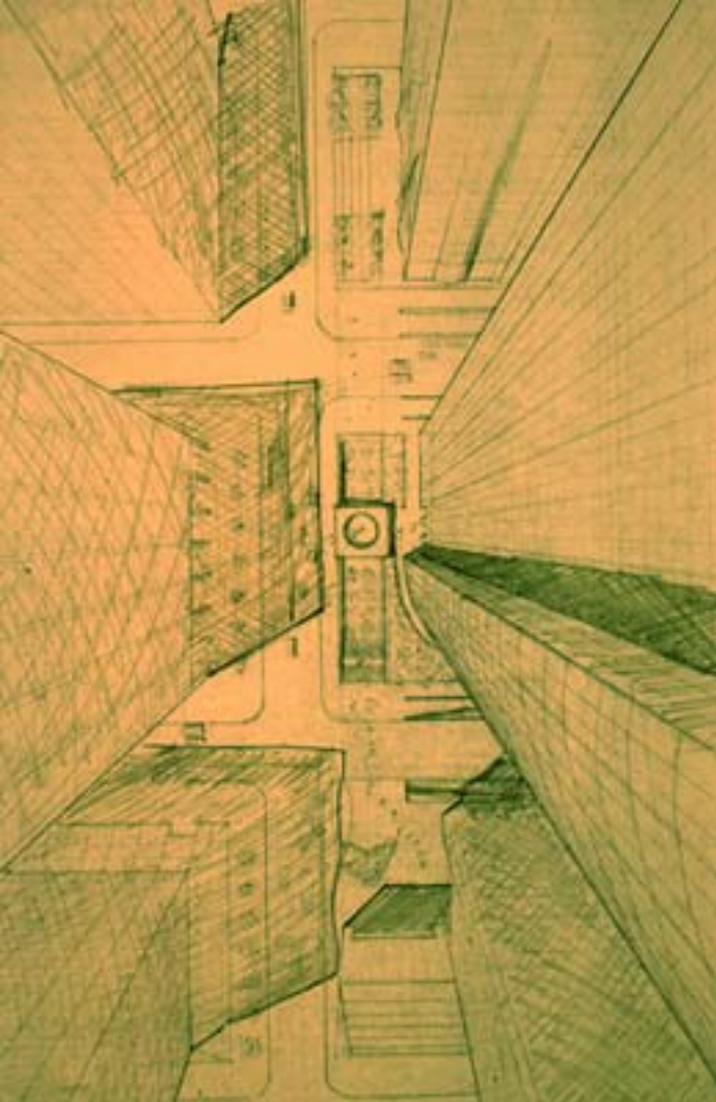
したのであった。

ヒューストンは、急激に発展しているブーム・タウンであった。昨日まで牛や馬がいた近くの牧場に、突然、ブルドーザーが入る。ダンプカーがあっちこっちと走り回る。そして、クレーンが立ち、超高層ビルの鉄骨が建ちはじめる。あらゆる所に住宅工事や、ショッピング・センターの工事がはじまる。猛スピードの開発に、道路整備が追いつかない。新しい建物、駐車場が作られても、排水設備の工事は遅れている。

ヒューストンは暑く、湿度が高

アライバンクプラザ、人間的なスケールを創るため、又多少自然を入れる為にプラザレベルにはエントランスパビリオン、滝やランドスケープの設計をした。





鳥瞰図のスケッチ。真上からプラザを見下ろす。



プラザのパビリオンから真上を見上げる。

いので、夏には空からバケツをひっくりかえした様な大雨が降る。真平な土地なので、道は川になり、大きな駐車場は湖のようになってしまう。粘土質の土なので、バイユと呼ばれる川はいつも赤茶色をしている。湿度がたかく木々はいつも青々していた。あまり文化的らしきものもなく、毎日蒸し暑いこんな所で生活していると、多少感覚が鈍くなる。詩を書いたり、絵を描いたりする気持ちにはなれない。

伝統を重んじる歴史の深い鎌倉、保守的な文化の街で育ったなおみにはヒューストンでの生活は大

変厳しいものであった。スケール感がなく、パンケーキの様に平べたく、山もなく、飛び出している物は超高層の建物だけであった。日本食もあまり手に入らず、生活を調整するには大変であった。あまり社交的でない彼女は友人もできず、私は出来るだけ SOM のイベントやパーティーには彼女を連れて行った。その頃、1978年にはヒューストンには日本の会社は少なく、日本人も少なかった。まだ数えられる程しか日本人はいなかった時代である。領事館主催の、正月の新年会には、私たちでさえ招待される程だった。

旅行もよくした。楽観的であった彼女でさえ多少ノイローゼぎみになってしまった。ヒューストンに来てから1年半ぐらいして、一人で一時里帰りをした彼女が2ヶ月程戻って来なかった時があった。もうこのままアメリカには戻って来てくれないのではないかと、私はとても心配した。好きで来た私でさえ、多少ヒューストンの生活には参ったところがあった。もうそろそろカリフォルニアに行く時が来たかと思った。日系人も多く、なおみにとって良い所だと思ったからである。

プラザのパビリオンを通してエントランスが見える。

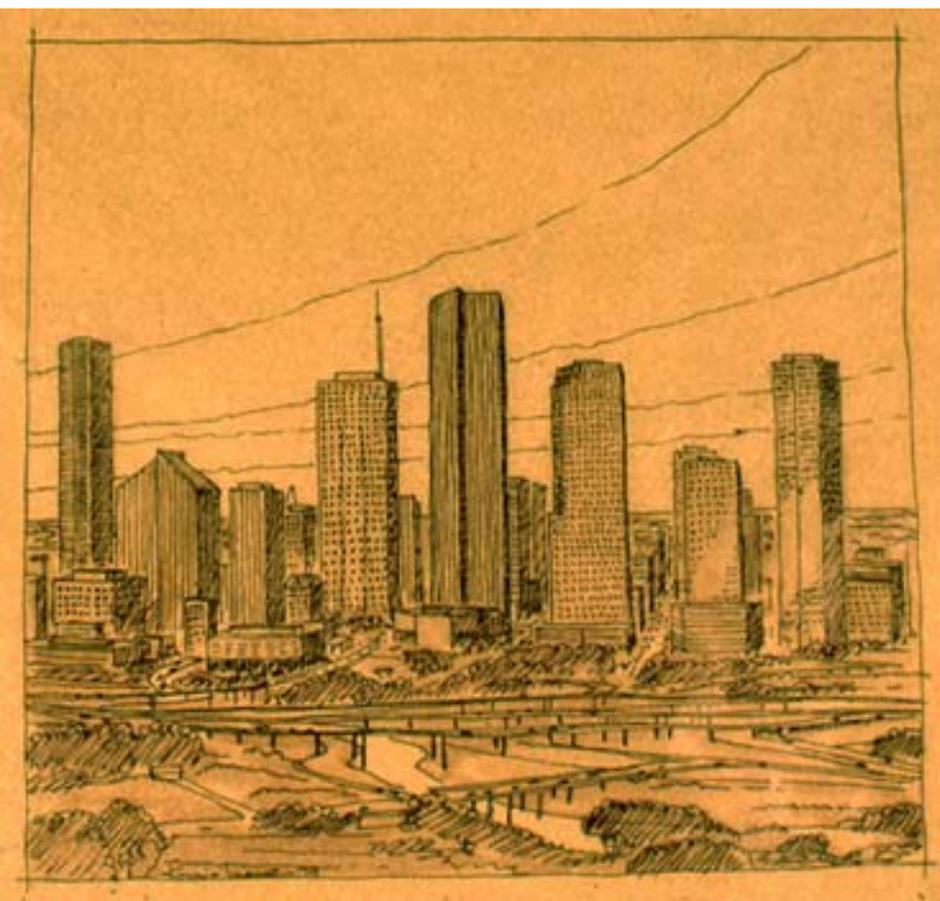
超高層のベース、ガラスのシリンダーを支えるように1階と2階の外壁を御影石でベースとなるように創った。



SOMの若い建築家が集まると、よくビールやワインを飲んで、いろいろなことを話し合った。よく冗談を言って騒いでいたが、時々、真面目な話もした。どんな建築家になろうとしているのか、どういう風な生活をしたいか、等々話し合った。私の友人の若い建築家達は、いろいろな夢を持っていた。

ある日、仕事を終わった後、皆でカウボーイバーに飲みに行った時、我々のリーダー格のマイクがだいぶ酔いが回ってきた頃、“皆はどんな死に方をするのが一番幸せなのか？”と尋ねた。そこにいた人はすべてデザイナーと呼ばれる建築家であった。まじめなグレイグは“私は建築の学校を作り、建築設計、哲学を教えながら、学生に囲まれて死にたい”と言った。ハーマンは“私はワイングラスを片手に、建築デザインの本を読みながら、自分の書齋で死にたい”と言った。ビルは“私は自分の事務所を持って、小さなプロジェクトでもいいから、自分の意図で設計し、現場を見、そこで終わりたい”と言った。そして、“クニオはどうなんだ？”と聞かれた。“私はどこでもいい、どこの国でもいい、ドラフティングテーブルに囲まれて死にたい。一つはスケッチを描くテーブル、一つは、模型を作るテーブル、そして、もう一つは、詳細図を描くテーブルと、私はそうしている時が一番幸せな気がするから”と。すると、私がずっと教えてきた一番若い、ジョージア

私のヒューストンの思い出



地下のプラザ、地上のプラザの階段の手すりは御影石を縋りぬいて造った。後ろの黒の御影石の壁は一面に水のシールの滝となっている。

州から来たプレーボーイのロブは大きな声で笑いながら言った。“皆は真面目すぎるし、固すぎる。人生はそんなものじゃない。俺は死ぬ時は女の股に挟まれて死ぬ”と言った。皆は反応した。“お前は相変わらず、馬鹿なことを言うな。”そして彼は言った。“皆、いつかは私が言おうとしていることが分かる”と。彼は彼なりにいつも人間はいかに生きるべきかということを考えていた。彼は25年後、“ゲンズラ”という巨大なアメリカの設計事務所のロサンゼルスの特長になった。